

7 エンパシーと史資料の批判的探究を教える

(Teaching empathy and the critical examination of historical evidence)

Tyson Retz

小野創太 (広島大学大学院)

d200149@hiroshima-u.ac.jp

著者情報

Tyson Retz : 2016年にメルボルン大学でPh.D.を取得。現在、歴史理論国際ネットワークポストドクターフェロー。エンパシーに関して、哲学的・教育学的に研究。”Empathy and History“(Berghahn, 2018)のほか、歴史学における理論と方法における中核となる問題についての論文多数。



<https://www.inth.ugent.be/researchers/tyson-retz> (最終閲覧日: 2021年7月16日)

重要用語

- ・ re-enactment…再演
- ・ contextualism…文脈主義
- ・ hermeneutics…解釈学
- ・ reproduction…再現
- ・ moderate…穏健的

本章の概要

まず、「エンパシー」をめぐる歴史教育研究の動向を概観した後、それらの認識論的な課題を指摘している。そして、コリングウッドの「再演」やガダマーの解釈学を参考にしながら、「エンパシー」を「過去と現在のインターフェース」として位置付けることが重要であると主張した。

議論したい論点

- ・ 私の研究と関わる部分があって興味深かったが、当時の時代の信念体系を支えるシステムの分析を生徒が行っていく上で具体的に何が求められるだろうか。
- ・ 特定の歴史上の人物・状況に深入りさせないということと、「再演」を行うことのバランスはどのように取るべきか。

本章の背景・目的 (pp.89-91)

・「エンパシー」をめぐる認知 vs 感情。

日常的な感情や情緒に基づくものと歴史的証拠の批判的吟味との違い。

・「合理的理解 (rational understanding)」、「見解認識 (perspective-taking)」、単純に「理解 (understanding)」などの代替案があったが、「エンパシー (empathy)」を採用。

→過去と現在をより効果的に対話させるために、歴史的文脈の豊かな理解を培うという好ましい意図 (good intentions) で、エンパシーは歴史教育・学習に導入された。

◎本章の目的は、理解すべき文脈を過去の行為主体が自らの信念を真実であるとし、それに基づいて行動することが可能であったという文脈と見なした場合、歴史的説明 (Historical explanation) のための非常に豊かな場が広がっていくことを示すことである。

エンパシーの必要性 (THE NEED FOR EMPATHY) (pp.91-93)

・歴史教育研究の多くが、使用する概念の歴史をほとんど気にせずに行われているのは不思議な事実である。

→概念の歴史には、実行可能な解決策の材料となる緊張状態と議論が満ちている。

①歴史の第一のポイント

1960年代後半の包括革命。様々な学力の生徒が一堂に会するように。

→ピアジェの「年齢と段階」モデル：どんな学校科目でも、その科目を最も基本的な要素に分割する限り、その原理に忠実な方法で教えることができる (Bruner, 1960; Hirst, 1965)。

☞今日の概念ベースの教育・学習アプローチの歴史的な起源 (二次的・手続的・歴史的思考概念)。

②歴史の第二のポイント

コリングウッドの再演 (re-enactment)：過去の人々の行為の理由の連鎖を自らの頭の中で辿ることで、その考え方を現代に持ち込んで自己認識の対象とし、現代の問題に対処する可能性について論じた。

→歴史家は、現象 (appearance) の背後に入りこみ、歴史的状況を洞察し、理解しようとする人々の希望や不安、計画、欲望、見解、意図を再現し、再演 (re-enactment) し、再体験する。

→歴史的探究の構造の礎に。

○But 具体的な教育の方向性は示していない。文脈主義 (contextualism) を掘り下げるべき。

☞歴史的な文脈を重視することで、現在の状況が見えなくなり、歴史が社会に貢献する力が弱くなるのではないかという懸念を払しょくする。

過去と現在の間 (BETWEEN PAST AND PRESENT) (pp.93-95)

・ Barton & Levstik (2004), Endacott (2010)の議論

→善意ではあるが、過去とその意味の形態に注目を集中させると、現在の側面を照らし出すことを犠牲にしなければならないという誤った仮定に基づいている。

☞エンパシーが提起する問題は、過去と現在のどちらに注意を払うべきかということではなく、歴史的探究において、現在の疑問、関心、参照枠が過去とどのように調和するかということである。彼らが乗り越える問題は、人間の意味の所在をどこに特定するか、そしてそれを現在に伝える目的に関わる、解釈学的なものである。

・ 解釈学の教育現場での活用についての保守的・急進的・穏健的の3つのカテゴリー

保守的 (conservative) …意味は歴史的資料に不変的に帰属する。過去を理解する=その本来の意味を再現する。

急進的 (radical) …過去を疑って扱い、その意味が現在の我々に伝えられるという概念を最初から疑っている。課題は、過去を理解することではなく、我々が是正しようとしている現在の不平等や不正に対して過去を並置することである。

穏健的 (moderate) …過去と現在を隔てる領域を交渉することができる多様な歴史的思考を構想するための最良の枠組みを提供する。保守的なアプローチと同様に、歴史テキストに付された意味を再現するという理想が残っているが、この再現の試みは、過去から得られる意味が、歴史家が過去の研究に適用する疑問や関心によって決定されることを十分に理解した上で行われる。心的習慣は過去を現代の服で着飾っている。

Cf. Wineburg (2001) 「不自然な行為」。背景となる哲学は Gadamer。

→問題を二分することなく、過去をそれ自体のために研究すべきか、現在を変える研究すべきかを問うのではなく、過去と現在の生産的なインターフェースで活動するのである。

エンパシーに伴う問題 (THE PROBLEM WITH EMPATHY) (pp.96-97)

・ドイツの「共感派 (empathy school)」:

「自己と対象物の区別が崩れ、自己が対象物の中に「入る」ことができる」

→Dilthey (2002)…この枠組みの中で、歴史的な世界で我々に受け継がれてきたものと、その世界の中での我々自身の現実の「獲得された心理的結びつき」を通して到達する歴史理解の概念を明らかにした。☞「歴史意識」との関連

・「現象学」からの批判 (Husserl, Gadamer)

過去の自己と現在の自己をなくすことで、異質で理解を必要とするものとして、自分自身に何かを突きつけることができるか？ある状況に深く入り込みすぎているために、状況があるがままに観察し、変化をもたらすために批判的に行為することができないのでは？

○重要なのは、その後、歴史家が自らの心の中で準拠枠を再構成し、同時にその再構成そのものを客観化すること、つまり、過去の文脈に属することを確認しつつ、それを現代の文脈に引き込んで再考すること。(再演)

歴史理解の文脈 (THE CONTEXT OF HISTORICAL UNDERSTANDING) (pp.97-99)

・我々が考え、信じ、行うことには、それらの思考、信念、行動を説明する元となる文脈がある。歴史を振り返ると、人々が心に抱いていたことそれ自体が彼らの行為を説明するのではなく、それらの信念が真実であるとみなされ、それに基づいて行動することを可能にした、より広範な知的・社会的・経済的・政治的状況が重要である。

・ Skinner (2001)による文脈主義的アプローチ

→歴史家が歴史資料を研究するという語は、その資料が作成された先行する文脈に寄与したり、介入したりする行為として扱わなければならない。

○この例として…

Seixas (1998) の「見解認識 (perspective taking)」

1967年にカナダのピアソン首相がカナダを公式訪問したシャルル・ド・ゴールを公共ラジオで非難した際に、「公然と無礼な態度をとった」理由を説明する。

→ピアソンの見解を再構築するための「直接的な文脈」は、ドゴールの前日のモンリオールでの演説。ケベック分離主義。

→実際には、この一連の出来事を可能にした状況が推論に入っていない。ドゴールの演説は「直接的な文脈」として理解されるべきではなく、ピアソンがラジオでドゴールを非難するに至った、その前の行為として理解されるべき。特定されるべき文脈は、カナダが統一されるべきだという信念を支える前提条件のシステムである。

○このような歴史的な文脈の探究は、エンパシーが達成しようとしている目的を正確に表す。

「なぜ政治家たちがこの原則を支持したのか、そしてそれは常にそうであったのか？」

「すべての人々が民族自決の権利を持つべきではないのか？」

→このような歴史的エピソードの探究が、我々が生きる現代の世界に関連した問題へと急変させる。